

に「科学認識の客観性」が損なわれるとの前提に立って、いかに科学研究から目的論的価値判断やイデオロギーを排除しようかという点に方法論上の焦点が当てられる傾向を持つに至っている。

こうした状況が生じたのは、今日あやまてる研究としてその研究価値が全面的に否定されている文革期の中国研究の多くが、強烈な目的論的価値判断、イデオロギーを含み、しかもその認識が決定的なほどに「客観性」を欠いたという事情が大いに手伝っている。実際のところ、文革期の中国研究が「客観性」を大幅に欠いた理由は、後述するようにその目的論的価値判断やイデオロギーそのものに原因があったわけではない。しかし文革後、とくに1980年代に入ると、中国研究に目的論的価値判断やイデオロギーが介在することが「認識の客観性」を損なうとみなす誤った定見が生じるようになった。今日中国研究の主流をなす方法論が依然、ウォッチング（観察学）に一方的に偏したものとなっているのはこのためにほかならない。

このため中国研究の世界では科学研究に目的論的価値判断が不可避に介在する現実が見過ごされたうえ、目的論的価値判断やイデオロギーがどのように「認識の客観性」と関係するのかという科学方法論上の問題がまったく問われてこなかったのである。以下、最初にこの問題を解く方法論上の糸口を付けておきたい。

[I]

科学研究の方法的基礎

(1) 構造主義と「認識の客観性」

目的論的価値判断やイデオロギーと「認識の客観性」の関連を方法的に取り込む努力は社会科学よりは自然科学分野あるいは文化人類学などの分野で、今日まで相当程度になされてきた。

たとえば文化人類学者のレヴィ=ストロースが

1955年に提起した論点に始まる構造主義は、その一例と言える。

ストロースは西欧中心的世界観を相対化し、現代西欧と同時代の別の地域空間に、未開とも見えるかたちで存在する社会が有する世界観も、また一定の完結した構造体系を有すること、その点で西欧中心的世界観と同等の資格を持つことを強調する⁵。ここでは未開と見える社会と、発展した高度工業化社会とを歴史発展段階の縦の序列に置き換え、前者を世界認識において幼稚で発展に後れた社会、後者を成熟し進歩した社会と見なすそれまでの通念が根本的に反省されることになった。ストロースは同時代的な横軸の空間的広がりにおいて、地球上の種々の社会の世界観が同等、同価値の資格で存在し、かつその世界観が有する「認識の客観性」には、一義的に決まるような優劣の差はないと考えたのである。

特定の文化体系下での価値判断やイデオロギーに基づく「世界認識の客観性」の度合いは、他の文化体系下での価値判断やイデオロギーに基づく「世界認識の客観性」と基本的に等価であり得る。つまりあい異なる世界観の枠組みに立って成立するいくつもの世界認識が同時に並存しうること、かつそれぞれの世界認識のうちどれがより「客観的」に世界を認識し得ているかは一義的に決定し得ないとしたのである⁶。

(2) 「パラダイム史観」と「認識の客観性」

自然科学の分野でこれと同様の方法的な試みを行なったのが科学史家のクーンだった。1962年にクーンが発表し波紋を呼んだ「パラダイム史観」は、歴史的な縦軸の時間的広がりから問題を提起する。ある時代の世界観と、別の時代の世界観、すなわち時代を前後する複数の世界観が、互いに同等、同価値の資格で存在し、その間に認識上の累積的な進歩は認められないとしたのである⁷。

つまり歴史における世界観の転換は、それに先行する時代の世界観の上に累積的に積み重ねられ